

「のうるし」と「しゃうぐま」

東京女子高等師範學校助教 保井コノ

府下江北荒川の長堤數里は陽春の候に至れば數十種の八重一重の櫻を以て飾られ是に泛べる野原は櫻草を以て色附けられます、此櫻草の間に混じて其紅色をして益々華やかならしめるものは「のうるし」の帶黄綠色でありませぬ。

「のうるし」は其花の構造が特別の形を持つて居りますから、今少し是を説明したいと思ひます。

まづ此植物の莖の頂きにある一個の花の如く見ゆるものを採りて檢べますと、中央には雌蕊の長い梗を持つたのが突出して居ます、此雌蕊は三個の實を持つて居る事は外から見ても明かな位明瞭であります花柱も柱頭も三本に分れて居ります、併し此雌蕊は實は花瓣をも萼をも持たぬ單性の一個の花なのであります、そして其雌花の周圍にあ

る所の多數雄蕊の如く見ゆるものも亦一個一個別々の花であつて是も單性であつて保護機能を具へない雄花であります、此雄花の外には萼の如く見ゆるものがあります、是は多數の花の群、植物學上では花叢と申しますが、それを包んで居る總苞と申すものであります、此總苞には其上縁に弧形の五個の特別の形をした部分があつて、此部分は花が開いて居る時はみづみづして居ります、是は蜜腺と唱へまして、開花中は常に蜜を分泌しまして此花の授粉作用の媒介をする昆虫の爲に食餌を與へるのであります、

「のうるし」は斯の如く蜜をもつて居りますけれども他の花の様に美しい花冠や萼をもつて居りませんから其方法で昆蟲を呼ぶ事が出来ません、そ

れで別の方法によつて昆蟲を誘引するのであります、是が「のうるし」の美しい源でありまして、つまり、花瓣や萼のない代りに花叢の下の葉が普通の下方の葉と變つた色即ち帶黃綠色を帯びるのであります。

凡て此「のうるし」に似た此類の植物は何れも其開花の時にありますと、其高出葉の色を變じます、それで此性質の著しいものは園藝品として珍重されるのであります、其例は、此頃何れの温室でも大抵の所には「しやうくぼく」或は「ポインセチア」といふものを植えて居ります此植物は「のうるし」と其屬を同じくして居るものであります、まして其花の構造もやはり「のうるし」と似て居ります、まして高出葉はまた立派な紅色、或は白色となり、ましてしやうくぼくの名は此高出葉のもゆる様な緋色からして來た名と思ひます。

「しやうくぼく」は多年生のものでありますの

と挿木でつきますから栽植には都合のよいものと冬期の花の少い時に、よろこばしいものでありますけれども外では保たれませぬ、しかも「フレーム」或は温室のある所でないに育ちませぬ、しかし是に似た「しやうくぼく」といふものは一年生で種子で充分に發芽をし夏頃に美しくなりますから面白いと思ひます。

是等の植物は引まゝとめて大戟科に屬する植物であります、是等の特徴として其莖を折りますと其切り口から乳様の液を出します、是は此植物の皮層部に乳管と申す管があつて此内に乳様の液を貯へ且非常の壓力を持つて居りますから、莖がきず附けらるゝ時には強力を以て乳液を押し出すのであります、此液中には此植物の養分を含んで居りますが中に一種の「アルカロイド」といふものを含ん舎居ります、此「アルカロイド」は非常に有毒なものでありますから子供連にはよく注意を

して置かなければなりません、殊に乳汁の様に出来るなどは面白うございますから尙更氣を附けなければなりません、

「のうるし」は此乳汁管の外に、「のうるし」等と同じ様に漆汁道といふのを持つて居ります、是が此植物の名野漆の依つて來た所以と存じます。

大戟科の植物には前に申す通り「アルカロイド」を含んで居りますから薬用として用ゐられます、また其種子から蓖麻子油を採る蓖麻子即ち「たうごま」も此科の植物であります其根莖から澱粉を

森の幼稚園 (四)

六 應接間

保育室の參觀は先づ御免蒙るが、來訪はいくらでも歓迎するといふのが森の幼稚園の一つの規定

採つて食用とするものあります、此澱粉は「タピオカ」と唱へられまして熱帯地方の産で只今日本にも澤山に参り居まして西洋料理に用ゐられて居る事は御承知と存じますが其植物は「マニホット、エチリツシマ」と申すものであります其他園藝植物として前に申した外に葉の表面が緑色で裏面が紫色の青森木や葉の色と形とに無数の變化を示す「クロトン」又變葉木の様なものも、「しやばてん」に似て莖を持つ「はなきりん」と呼ぶものも皆此類であります。

S K 生

です。保育室が絶対に幼児の爲めの場所で見せる處でないことは更めて言ふ迄もありませんが、他所の幼稚園では種々の事情からそうも實行